

新聞はなぜ真実を書かなかったのか

「新聞はなぜ真実を書けなかつたのか、書こうとしなかつたのか」。それにどれだけ答えられるかですが、とりあえず、一応レジメに沿って補足しながらご報告を致します。

ご紹介いただきましたように、私は一九四九年に生まれました。戦後の生まれです。したがって、戦争というのには全く経験しておりません。

親が戦中、樺太に兵隊でいたとか、女房の親とかに話を聞くことはありましたが、僕自身は、まったく経験がありません。

新聞社に入りまして、もう三十四年ぐらいになるでしょうか……。おもに社会部で、司法関係の記者をやってきました。そのあと論説委員を六年ほどやりまして、いま、編集委員になって七年目です。主に社会部系なので、司法とか、最近では歴史の問題とか労働とかをやってきました。

もともと学芸部の歴史担当の専門記者とはぜんぜん違って、私は歴史には、まったく、しろうとです。そんな私のような新聞記者たちが、チームをつくり、一年間、朝日新聞の夕刊で「新聞と戦争」という連載を、細々とやってきました。

去年四月二日に始めまして、回を重ねて今年の三

月二十八日で終わりました。だいたい月曜日から金曜日で、全部で二十三シリーズ、二百四十三回に及びました。終わったばかりで、いまほっとした段階ですが、これを六月に朝日新聞から本に出す作業を、今やっています。

「新聞と戦争」の問題意識は、いま猪熊さんがおっしゃった最後のひとこととです。

「なぜ新聞が、あの戦争……昭和の十五年戦争に協力し、そればかりでなく戦争を煽っていったのか？ なぜ新聞は、あやまってしまったのか？ では、どうしたら良かったのか？」

ほんとうに改まったか？

連載の最後、二百四十三回目の、冒頭に書いた部分を紹介させていただきます。

朝日新聞の、もと記者で村上寛治さんという、いま九十二歳の方がいます。彼は何度か召集され、その最後の再召集で、敗戦の八月十五日には、西鹿児島にいたそうです。

記者になったり、再召集で兵隊になったりしていた村上さんは、一等兵でした。彼は年かきですが、一等兵から上等兵に、なかなかなれなかつた古兵だったそうです。

村上さんたち兵隊が、その八月十五日に、作業をひと休みしているところに、近所の農家の主婦の人が飛んで来ました。

「いま天子さまが、戦争は終わったとおっしゃった」というのですね。

ところがまわりにいた兵隊は、それを信じない、信じたくないのですね。

「そんなことあるか」と叫ぶ兵隊もいる。

村上さんは、そういうなかで、つい直前まで新聞記者で、朝日新聞東京の社会部にいましたから、だいたい状況は、ある程度わかっていた。それでこう言いました。

「これは、負けたということだ。降伏という惨めなことだよ」と、皆に説明をしたのです。

そうしますと、仲間の兵隊さんの一人が、村上寛治さんに食ってかかりました。

「あんたがた、新聞記者は、そげんこと、いつちよん書かんかったじゃ、なかですか」

この言葉は、いまも新聞に突き刺さっています。

「そげんこと、書かんかった」

「なぜ新聞は戦争協力をしてしまったのか」というときに、或る種の前提を、われわれはおいていま

す。

すなわち、「戦争」そのものがあやまりであるのか？ あるいは、正しい戦争もあるが「あやまりである戦争」に協力してしまったから、良くないのか？ これが問題です。

もうこんなことを「不戦兵士・市民の会」の先輩に申し述べることはないのですが……。

ご承知のとおり、日本の戦後社会の平和意識は、「すべての戦争は、悪である」という高みに達しているわけだと思えます。

ところが、アメリカに行っても、イギリスに行っても「正しい戦争はあるのだ」……と言う。「悪い戦争もあるけれど、これは正しい戦争だ」とも言うたりする。

例えば「自衛の戦争」「制裁の戦争」だということとで、世論を動かすわけです。そういうのは「正戦論」というのですね。

「すべての戦争は、悪である」が国民過半数

それに対して「すべての戦争は、悪である」というのが、多分、日本では、国民の過半数を超えている意識だと私は思っています。

「いままで、戦争を始めようとする権力者は、い